

【戦後史の解放Ⅱ】 自主独立とは何か

前編—敗戦から日本国憲法制定まで 後編—冷戦開始から講和条約まで

細谷雄一著 (新潮選書、各1300円+税)



本書は、英国外交史研究を専門としてきた著者が描く「世界の中の日本」戦後史の第2弾である。本書が叙述の対象とする被占領期の日本が投げ込まれたのは、国際秩序の一つが終わり、他の一つが始まるうとする国際環境の推移の真ただ中であつた。

第二次大戦終結直後の東アジアでは、日本の「帝国秩序」崩壊後の残骸の上に米國主導の国際秩序が築かれようとした。この国際秩序の形成

出身の歴代宰相であつた。

本書では、近衛文麿との対比において、彼らの「国際性」の意義が説かれる。国際秩序の変移への「適応」を迫られた往時の日本にとって、宰相の「国際性」の持つ意義は決定的であつた。こうした外交官出身の歴代宰相の対照として指摘されるのは、戦後思潮に大きな影響を及ぼした

「世界の中の日本」との視座

評・櫻田淳

(東洋学園大学教授)

知識人における「国際性の欠落」や「視野狭窄」である。たとえば、宮澤俊義は、現在では憲法第九条に拠る戦後護憲平和主義の開祖として語られるけれども、日米開戦の折には「快哉」を叫び、戦後の新憲法制定過程では明治憲法の骨格を残すことに執着した。著者は、そうした宮澤の姿勢を「学者としてのインテグリティ(誠実さ)」に欠ける」と評している。また、丸山眞男はもともと国際政治・外交史を専門としていなかったにもかかわらず、終戦直後

の「空気」に半ば呼応した平和論を書き、世に影響を与えていった。宮澤や丸山に対する批判は、本書の白眉である。こうした「国際性の欠落」や「視野狭窄」の色合いが濃い議論は、先年の安保法制審議の事例にみるように、現在でも折々に披露されているのである。

「日本」でなく「世界の中の日本」を凝視する本書は、米國主導の国際秩序の動揺が語られる折、時宜を得たものであり、その意義は甚だ大きい。願わくは本書を通じて、「世界の中の日本」という視点が日本における公論の「常識」として定着することを。